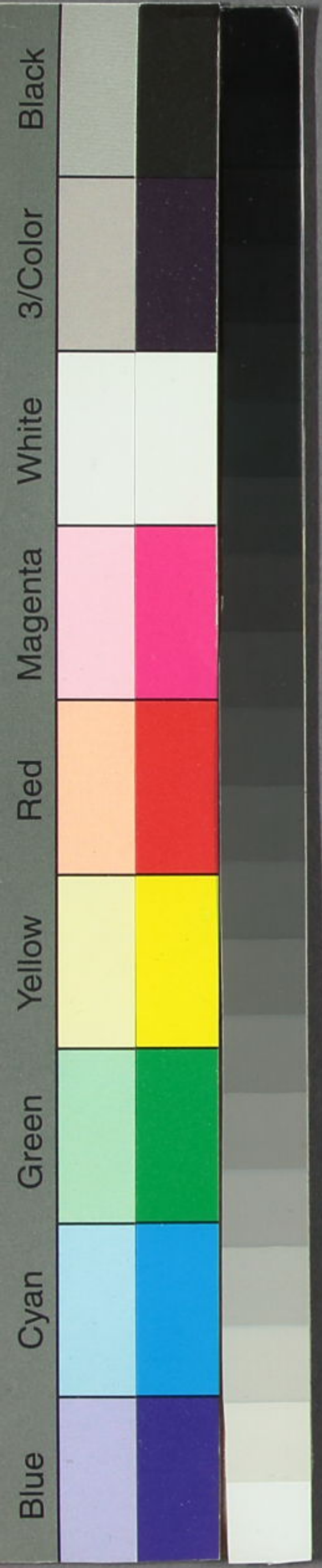




228  
229  
230

○ 詠遠江岡部賀茂神社長歌

其かみの事きとば かげまくも  
あやまかこし 遠つ神 遠つあふみに  
けりなるふ 恵もふちの 郡ある 岡部  
の里く 山代の 賀茂の宮居の 新宮の  
其瑞籬の 影うつし いはひこし せむ  
皇の 神のみよもの おほみかの つば  
ねのかずに つかへつる そのしるす



に けらけらの人よつたへて すべて神  
の みけにうきある いほまちの なは  
しろ水の たえやらず 任せ給ひし 文  
永き 羊の名よみし 御しるしを うけ  
つぐまくに 久かきもの 乾あめの元はもとの とし  
よさへし 一りたまへる みことあり  
うけのよみ来て 君が世を 千世萬世と  
いのちよば わぎへの氏も おのづから  
せよつていへて みしるしの ありとけ  
しごと 夕附日 さすがよ時世 うらろ

へば かひもなきもの 波風の しくめ  
るまくに 素駒の けらげよ田たね長の 畦あぜ  
をけかち みぞさくわらうず いほまぢの  
名のみせりして けらまちを あらざる  
りぬるることよしを 思ひなげけど せ  
んすべの たづまをしらす ひつちほの  
たのみるあらずしかれども うからや  
すとの 多けらげ 神もつこのへももの  
のふせ 道をもふらして おのがどち 時よ  
あふきを ねがえぬ 猶世をいつつ 梓

弓 引馬の里よ たてなめて 軍の君の  
けし雲の おくり給ひし 引馬野よ く  
さむすまげぬ 露霜の 消なば消ぬべく  
負征矢の 雲をみづかて あらまき  
あらし北風を ふせぎつる かひしあり  
とて 物がづけ いたづきまつる 此神  
のみいさほひある 一りしとて 神の  
みとらる まんさらた あがちしむひて  
氏人は いましつる 一つ まるびもあ  
敷なぬども まはよ来て あれもよ

あげす 岡のべの 神代のころは 杉ぞ  
しるらむ

右賀茂英洲著 岡部日記一名東帰所載

○近江彦根山のふもとにるる浦へよある  
長歌一ツ短歌二ツ

岩橋のありしこの國に河一引の山のふもとに  
なまり海もさやけし天つふ彦根の山は  
らるしなへ多うそそくする 高き波のよする  
ありしと朝よむしうち出るはけり

平野又かきくことし 秘のこけりこき出白浪の  
八重をさうしうりちのつめつうまのつら  
沖へはむおまのいざさこ魚つらは漢の島に  
ちりあつてふひさる高根久くあを井に  
遠くはる島は良れ高根と沙船をさうま  
いそり神風の伊吹のくはらうつ山も津と  
いりさかひは多川の泉の山高くた  
うひくそり大空く霧くかひさし  
さへつる春は浦をさうはる下花咲き  
く霧くちわると興る月のやわらき秋を野

遠くはる千種花と記仲造は雁なきお  
もり芦葦下は水鳥やわらく園さうさ  
くちと記みつうかやうけしは記さ  
あうたぬさ海りあさこのさみ  
朝よるはとも何のすあまの海八十の  
水門くがするしは  
うこくしにうちれらさうさ引のや  
白をさくかあるあま  
古稱海量著ひとよ花所載



るよふあしを　なまぬふちうらふ  
せそあしを

○手向宮木塚長歌

うつせいのせあゝるあはけけのなぐもり  
しくもある歎高きしやまおのかとちもか  
すふもりのちのみの父とあうれとせう  
あめの母よよとまのせの業にまうるものを何  
しるも心よもあらぬたをやめの標くしけ  
志をり多踏名の湊より船のかち枕して浪  
のむたかざりかくより玉藻なすなひもてぬ  
れいづれくもあふしくもあるらるゝのこ  
たをつへくまつける身の生るともあしと物

よひようひなけうひと一月を息つきく  
しむきはる命もつらくおもはるる此時  
川のあの方へはあそびの波をたたく  
黒髪にむすぶひむすぶひも 返す  
おさつきををさめてつらにめしりつ  
くらしのへの浅茅よりさかふくふ  
るしの石をたたり手向も

右 上田村成遺著 春雨物語 宣宗が塚所載

○某の番匠<sup>たむ</sup>たものさしむしたる

事 長歌

あがきまに何がしとかいふ番匠ありけり  
のれりやせ津を造らんとしておの番匠をよび  
てとづめおとけるにあが家のほしなめに  
はさうしてあるおとけにそのあつむいよ  
ばいしきぬそれをわたけらたふりけるお  
ののきいりておとけに飛浮人とけしたる  
とていふことなん侍るは語りたれを  
あがきたにさしむしたははれよかくせんよ

みゆーける

吾家に、茶摘水汲、女等は、二人一ある  
を、一人はゆる、肥ふくらひて、家のうち  
あゆめるさまは、家鴨ちふ、鳥にやも似、  
おもしろは、瘡瘡モカサのあとの、ひまもなく、  
ぬちてありて、柚の實ちふ、ものほし  
みれば、蜂吹ハチのみ、人にもあらず一人  
けも、髪さへ長く、膚しも、白くしあり  
て、佐尔サ頼ふ、妹に一あれば、思はざる  
人一人なきま、こそしゝるを、庫クラつくらむ

と、此里の、飛弾トビの工匠カクシを、呼兒鳥、よ  
びておたらひ、日をあまた、とらめおま  
けり、かくのこに、とらめ一おけば、飛  
弾トビくま、おのちあやめの、志なむたる、  
門出カドありぶり、朝アサもひよ、見のまくり  
こ、荏蔣シヤウの、おもしろみでれて、顔花カノハの、  
戀コイにたへぬは、いつしと、たぬらひを  
りて、人みなあ、いぬたるころに、澤蟹ササガ  
の、横造ヨコゾウしつ、くらき袖を、かいたで  
さぐり、うがぬをへ、けひぐりにけを、



女はまゝ、おりのみけねば、古衣、うちお  
どろまきや、たれ人か志ら波きんと、大衆  
よ、をらびうけを、われいよよ、飛弾  
しくこなり、墨繩の、たぶ一すぢよ君を  
しこ、おむしあくがれ、人志らず、うご  
ひてもぬと、おくまて、思へるこそよ、  
まづぶきふ、おちどつふまぞ、やうしよ  
心なごみや、其人の、なしのまわし、  
釵太刀、身をまげぬれど、大根オウネなす、ふ  
とと腕タデ、筑紫櫛、さしませいぬて、雲井

なす、遠津神代よ、真壘マコすし、鶴鴎ツルカめ、  
なす、遠津神代よ、事のごとくに、ぬもごらよ、  
まくはひぬまば、女いよ、いこくぬし  
こ、こよさへど、高麗コウライをあらうむ、日本  
も、ひとつとこるに、今よまよ、つごひ  
かりぬと、声あがて、なまいさちひり、  
男も、おやじころに、おのよめ、なが  
き命も、今こそは、たえぬぢかりたよ、も  
ろこ急よ、なげまこつぎ、さぬなの、  
やとなるまで、志らひあひ、やむ間な

ゆれば、志は舟のからびてあせる、老姫  
らの、うさぎの耳にも、梓弓、おと聞つけ  
て、夜もすのら、いのねらねと、にらつ  
どり、わけのなきぬと、いざとくも、お  
きて出つ、今こそは、佐祖は明ぬれ、  
淫婦も、おさよしくと、声たやく、よば  
まひぬぬど、夜一程を、まくばひあかし、  
いかさまに、いたつさつらん、雷の如、  
軒のみして、一言の、こころもあらざ、  
かしくた、もこげもせぬが、老姫いぬ、

い〜い〜い〜、女の、かつきてあせる、  
奴婆玉の、ゆるれ衣を、かき柳、ひきは  
ぎぬれば、みうらをば、かいはちるぬど、  
玉櫛笥、二布とまきけ、駒造者、土師が  
ほりきん、黒色の、あらまきとびしを、股  
長よ、うちふせりつ、深山なる、熊と  
見るまで、黒き毛の、おひくる中よ、さい  
を鹿の、尻とみるまで、真白ある、紙か  
きまきし、秋の田の、いぬたるぬが、  
志水者の、飛弾の工が、此日ごろ、心つ

せら、佐<sup>サ</sup>尔<sup>ニ</sup>頰<sup>シ</sup>ふ、妹<sup>イモ</sup>は<sup>ハ</sup>な<sup>ラ</sup>ら<sup>ズ</sup>で、家<sup>カ</sup>鴨<sup>カモ</sup>す  
 す、醜<sup>シ</sup>女<sup>メ</sup>なり<sup>シ</sup>ひ<sup>キ</sup>を、い<sup>ハ</sup>の<sup>ハ</sup>ま<sup>ル</sup>ふ<sup>ハ</sup>、お<sup>も</sup>ひ<sup>ひ</sup>  
 と<sup>り</sup>て<sup>ハ</sup>此<sup>ノ</sup>う<sup>ら</sup>い、お<sup>の</sup>の<sup>く</sup>あ<sup>や</sup>め<sup>と</sup>、ふ  
 ー<sup>ま</sup>を<sup>、</sup>あ<sup>て</sup>て<sup>い</sup>ぬ<sup>け</sup>し、う<sup>た</sup>ゆ<sup>ゑ</sup>を、  
 くれ<sup>い</sup>ま<sup>ら</sup>ん、飛<sup>ヒ</sup>弾<sup>ダマ</sup>人<sup>ト</sup>を、あ<sup>る</sup>や<sup>知</sup>ら  
 ず<sup>や</sup>、い<sup>ま</sup>く<sup>わ</sup>し<sup>も</sup>

反歌

鶴<sup>ツル</sup>羅<sup>ワ</sup>、つ<sup>つ</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>や</sup>ら<sup>ず</sup>屎<sup>コノ</sup>糞<sup>ノ</sup>乃<sup>リ</sup>

さ<sup>や</sup>れ<sup>る</sup>こ<sup>と</sup>を<sup>た</sup>く<sup>ふ</sup>い<sup>し</sup>る<sup>や</sup>

(文政八年刊、阿波國ノ遠藤春足著、白癡物語ノ  
 一節。春足ハ六ツ園ト号シ、六樹園雅望ノ門人ナリ)

○

馬 <sup>ウマ</sup> より <sup>も</sup>	新 <sup>ニ</sup> こ <sup>ろ</sup> う <sup>ら</sup> ん <sup>が</sup>	馬 <sup>ウマ</sup> の <sup>脊</sup> 骨 <sup>ノ</sup>
壺 <sup>ヒ</sup> い <sup>あ</sup> れ <sup>も</sup>	く <sup>ら</sup> う <sup>つ</sup> 舟 <sup>フネ</sup> を	酒 <sup>サケ</sup> も <sup>あ</sup> れ <sup>す</sup>
う <sup>ら</sup> や <sup>酒</sup>	こ <sup>ろ</sup> は <sup>あ</sup> る <sup>も</sup>	何 <sup>ニ</sup> び <sup>ま</sup> の
山 <sup>ヤマ</sup> 路 <sup>ヂ</sup> より <sup>い</sup>	岩 <sup>イハ</sup> が <sup>根</sup> よ	い <sup>づ</sup> つ <sup>あ</sup> づ <sup>ま</sup>
木 <sup>キ</sup> の <sup>枝</sup> よ	傍 <sup>ナド</sup> に <sup>あ</sup> る <sup>ん</sup>	そ <sup>こ</sup> り <sup>へ</sup> ぞ
馬 <sup>ウマ</sup> い <sup>ら</sup> う <sup>一</sup>	鯨 <sup>クジラ</sup> と <sup>ら</sup> る	熊 <sup>クマ</sup> 野 <sup>ノ</sup> の <sup>海</sup>
数 <sup>カズ</sup> お <sup>ほ</sup> く	う <sup>か</sup> し <sup>船</sup> を	あ <sup>ま</sup> の <sup>さ</sup> よ
千 <sup>チ</sup> 樽 <sup>ヅル</sup> 五 <sup>イ</sup> 樽 <sup>ヅル</sup>	酒 <sup>サケ</sup> つ <sup>み</sup> て	常 <sup>トコ</sup> に <sup>ゆ</sup> き <sup>こ</sup>
する <sup>ら</sup> あ <sup>ら</sup> ふ	富 <sup>トヨ</sup> 士 <sup>シ</sup> 見 <sup>み</sup> と <sup>お</sup> や	名 <sup>ナ</sup> の <sup>お</sup> り

夫は舟は船	このふねも	小船あがらに
うま酒の	かぐもあはば	ここののがうま
と樽舟の	なましめも	おもしろし物
かゝるふね	はまを渡る	うみのめし
こゝろさう	八十さう	乳ぶささる
こぼるめ	酒をい	そのこぼる
さばるうま	このさけ	のまぬら
岩木より	まりそ	のこぼる
させは下戸	あまの	あらしけ
宮 桑名	七里きん	さくら

手もだも	眉の皺	よせくる浪の
いなこつ	ひり	いと
酔もあ	のこ	あつ
あちこち	海の面	とぶちどり
子もがけ	こころ	かく
あつこ	醜のふ	あつ
かひ	酒ゆ	尾張も
海	ま	打日
宮	新	

反歌

真帆片帆やうる上戸又あつざんば

思もん宮の海りあやしや

文化五年刊、鉄格子波丸著、狂歌やはごるもの紀行  
一節、波丸の浪速久

○相馬の墟を過きてあめる

掛 かけまくら、あやまうりこに、久のそ、  
天海の船の、津位を、ぬままくほりし、  
船がゆく、あづまの國は、東林の、都なす  
城を、いぬめし、遊りかまへて、海と  
近き、國は司を、おひえそけ、討平けて、  
ちんやぶれ、あゑふる神と、人らのの、  
おひえとる死、まつらひし、毛とごの  
かみも、おふさごの、まけの随らく、  
官軍を、率あといひ、いふなる、いふ

ずのきみ<sup>將</sup>みづら、も<sup>放</sup>つ矢よ、か<sup>頭</sup>べ射させ  
 て、たまの緒の、命<sup>命</sup>死けり、志<sup>志</sup>さかへる、  
 親<sup>親</sup>からや<sup>族</sup>うえ、<sup>あや</sup>雪の、け<sup>消</sup>めら<sup>ら</sup>ごと  
 く、こ<sup>尽</sup>わ<sup>ら</sup>ぬ、<sup>不</sup>あ<sup>げ</sup>び<sup>い</sup>せ<sup>も</sup>記、その  
 跡と、荒<sup>あ</sup>ら<sup>る</sup>山、雨の<sup>徳</sup>た、お<sup>燐</sup>び<sup>も</sup>  
 え<sup>い</sup>で、あ<sup>邪</sup>鬼<sup>鬼</sup>もの、<sup>盤</sup>魅<sup>助</sup>ま<sup>い</sup>を<sup>哭</sup>び、  
 諸<sup>諸</sup>あ<sup>あ</sup>に、<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>び、<sup>獲</sup>や<sup>獲</sup>ま<sup>こ</sup>、<sup>狐</sup>さ<sup>わ</sup>  
 ぐと、<sup>里</sup>人<sup>の</sup>、<sup>あ</sup>ら<sup>る</sup>を<sup>聞</sup>け<sup>ば</sup>、<sup>ぬ</sup>ぞ<sup>玉</sup>  
 此、<sup>思</sup>髪<sup>太</sup>り、<sup>村</sup>野<sup>の</sup>、<sup>心</sup>え<sup>清</sup>え<sup>て</sup>、<sup>い</sup>  
 と<sup>も</sup>悲<sup>し</sup>

短歌

たの浪の風、荒<sup>あ</sup>ら<sup>る</sup>山、雨の<sup>徳</sup>た、お<sup>燐</sup>び<sup>も</sup>

廣<sup>ひろ</sup>江<sup>え</sup>もあ<sup>あ</sup>せ<sup>て</sup>お<sup>お</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>も<sup>も</sup>ん

文政元年刊、高田與清著、相馬日記中所載

○春日從田子浦望富士山作

長歌並短歌

八隅知<sub>レ</sub>、我大君之、神之隨迹、敷座<sub>ニ</sub>國尔、  
 國八之裳、多爾安禮登毛、打寄、駿河之邦、  
 者、邦如良加、山之見可欲、山可良之、河  
 之音清之、浦並之、宜國曾、其山之、多留<sub>ル</sub>  
 中尔、天地之、割連志時從、神左備天、高、  
 貴伎富士之峯遠、仰天見禮者、怪之久茂、  
 秀而有山歟、梓弓、春去來者、春霞、千重、  
 尔棚引、夏去者、木之暮志、尔、白雲毛、

以行京都乃此、露霜之、秋去來八、秋霧之、  
黃充管、冬去者、山風真風尔、時雨之雨、  
胡無之降利、雖然、峯宇高美歟、霞谷、立  
毛不隱、白雪、以立及八須、秋霧毛、蔽  
兼都、氣堂仁、吹毛拂八天、真白成、高  
根之雪八、何之時何三代與里、此之毛也、  
降置留雪楚、幾重尔可、積而之雪、水無  
月之、空尔後消繫須、万代爾、弥高尔、  
真白尔毛、積而此來管日本之、大知之邦之  
鎮登毛、神左比未之而、寶鞠成天布山遠、

霞立、春之盛、櫻花白布弥生迹、押照、浪  
華之因乎、朝鳥之、朝立出而、旅衣、日數  
重天、思達、手携良比、足引之山行野往、  
浦過手、田子之浦迴尔、今日之毛也、打出  
天見連者、濶之迹、以也益利都々、思之尔、  
尚之過都々、云毛不得、名附蒙不知、安也  
之久毛、秀多流山歟、真白尔後、降之久雪  
歟、此而吾、思之心、千早振、神毛知八此  
而、今日八之毛、晴天之空歟、如此而尔、  
見放之山遠、田子之浦迹寄來留波之、立歸



里、故郷久尔、委曲カク加尔、カク語カク继都、闻人  
尔、云渡里奈者、カク類奈伎、家土カク卷奈礼也、  
名委カク幾、布士之高根之、今日之氣八比者

反歌

管之根之、長日数乎、重而蒙、見卷之欲支  
布士之山鴨

今日之毛安礼、布士之高根迹、雲消天、真

白尔見鶴、雪之毛鴨

文化九年刊、西浦鶴亭著、東のつと所載  
鶴亭名祐賢、浪速人

○詠窪根山長歌並短歌

あかりた、まよぬのやうな、やまから  
か、えん水のりこし、海うらら、今く  
尊し、其やま哉、いりの厚きい、若うぬ  
ル、く、たあ、く、く、  
く、く、り、其山、八尾の上、何やしく  
え、海より海、千子根、秋九市代り  
常、く、く、く、く、く、く、く、く、  
波きり、く、く、く、く、く、く、く、  
浪の、八きを、く、く、く、く、く、



の城かしの、やしののぐく、山の東、ま白く  
づ、にまゑまける、かくぞのさ、あやし  
き山、かくそのさ、何やし湖うみを、思おもち  
手携て、事ことを、思おもふくて、や  
よ、けりも、こゝろ、あし

反歌

そとねやぬま、本たつ、あやし  
たへ、湖うみの、あし

文化九年刊、西浦鶴亭著、吾妻のつと所載

○

大木、夢や、小名、あや、岩、ねめ、  
懸かり、ま、川、の、さ、や、ら、道、と、  
あ、り、人、の、言、ひ、た、し、其、山、を、  
し、も、あ、ま、つ、ま、の、あ、ま、り、は、ら、  
た、山、さ、ま、り、大、江、戸、を、も、  
朝、あ、あ、さ、ま、り、二、荒、の、や、  
下、北、朝、あ、ま、り、あ、ま、り、は、な、  
と、確、の、ま、の、ま、り、立、東、國、原、真、  
その、あ、ま、り、あ、ま、り、あ、ま、り、立



文化九年刊、西海路よりき、吾妻のつと所載